

<https://book.asahi.com/jinbun/article/14135569>

朝日新聞の論壇時評で林香里東大教授がスポーツと多様性をテーマとする論評の中で、インターセクショナルリティを紹介されていた。この本の著者アリシア、ガーサに象徴される3人の共同代表はまさにその体现者のようだ。

また、アメリカの共和党の歴代リーダーが人種主義をいかに利用して、政権の座についてきたか。トランプはその対応がある意味ストレートだが、隠語で揶揄するレーガン。民主党サイドもクリントンが犯罪取り締まりでそちらの世論に乗ったこと。オバマでさえ、暴力をふるった白人警官と被害者家族を招待して和解の演出しかしなかったこと。政治不信、、、。どう乗り越えたのか。

斎藤幸平さんが指摘しているように、バーニーサンダースを支持した BLM や学費ローン、環境問題などの市民運動が、トランプからの政権奪回のためにバイデンとの政策合意をする成熟した戦略がそこにはあったのだ。そして、アリシア、ガーサを鍛えたのは武市会議員が目指す、コミュニティオーガナイザーとしての活動だ。

マイノリティ多住地域のスラムクリアランスへの対抗や、ドラッグと生活苦の住民を組織し、居住改善運動に草の根組織で取り組む活動家たち。その姿は大阪の西成、釜ヶ崎や部落解放運動と重なって見える。一軒一軒の家を周り、悩みを聞き、住民集会に参加する意義を説く。開発業者側のコンサルがカラード、黒人をわざと雇い、スーツの似合わない人間たちが、お金で切り崩してくる。

そこには激しい利害対立と戦いがある。保守派が人種主義を巧みに利用し、福音派や宗教を巻き込み多数派工作をしているアメリカの現実。

BLM はなんと 2012 年のレイボン、マーティンさん殺害事件からずっと準備されていた。今や世界に支部を持つ巨大なネットワークとして成長した。しかしその原点は、地域から草の根で組織を作り、広汎な連帯、連合を作り出すコミュニティオーガナイザーたちの存在だ。

さらにインターセクショナルリティという新しい考え方、新しい思考が運動を飛躍させたことと納得する。アメリカ民主主義の底力と、人権運動の今後に力になる一冊です。



BOOK.ASAHI.COM

ブラック・ライブズ・マター(BLM)共同代表が、その実像を語る 『世界を動かす変革の力』 | じんぶん堂